

【学校法人 平方学園は2023年で90周年を迎えます】

# 明和児童クラブだより

第7号

2023年10月24日発行

(文責) 鷲頭

## 今年度3回目の避難訓練を実施しました！！

10月20日（金）には、今年度3回目の避難訓練を実施しました。今回の避難訓練は、「不審者が敷地内に侵入した場合」を想定しての避難訓練でした。

前橋市役所の共生社会推進課の防犯アドバイザー2名にお越しいただき、実施しました。



16時45分頃、わめきながら凶器を持って侵入してきた不審者を、職員が発見し、笛の合図で、児童は、自分の保育室に逃げ込みました。職員2名が「さすまた」を使って対峙し、時間をかせぎました。



児童が逃げ込んだ保育室では、カーテンを閉めて、明かりを消し、バリケードも築きました。



最後に、防犯アドバイザーさんから、プレイルームでお話しをしていただきました。



は、員  
職、確  
者の、と  
審名、定  
に、れ  
保い、想  
いさ、訓  
避了、し  
難了、ま  
た。し

## 子育てのあれこれ No. 20

前回、予告させていただいたとおり、今回からは、「いじめ」にかかわることについて、子育てに関する研究をしている様々な専門家の理論なども踏まえながら、考えていきたいと思

います。まず、最初に、「明和児童クラブ」として全力を尽くさねばならないことですが、それは、言うまでもなく、①「いじめ」の早期発見、②「いじめさせない」ための指導③「いじめ」の被害者や加害者への適切な指導や対処などです。

この①～③の観点で、主な具体策を紹介しますと、以下ようになります。

**①について** 日常の学習の時間や室内遊びの時間、外遊びの時間やプレイルームでの時間において、職員が、児童の言動に十分に注意して見守っています。特に、一人になっている児童が、自分で好んで一人で行っているのか、それとも仲間に入れてもらえないのかを見極めるようにしています。例えば、鬼ごっこなどでも、いつも同じ児童が鬼になっていないか、遊び道具の片付けもいつも同じ子がしていないかなども気をつけて見えています。また、友達関係に関する児童からの訴えには、しっかりと耳を傾けるとともに、自分から訴えられない児童に対しても、つぶやきや表情をてがかりに職員の方からも声掛けするように努めています。

**②について** 児童の発達段階によっては、気に入った友達とだけ遊びたいために、他の児童を排除するような言動をとってしまう児童もいます。そのような児童には、仲間はずれにされた児童の気持ちを考えさせるなどして、望ましい態度について職員が日々指導しています。また、孤立している児童に対して、進んで声掛けができた児童を賞賛しながら、そのような態度の大切さについて指導しています。また、大人の不公平な態度がいじめを誘発することもあるので、職員は、できる限りどの児童に対しても公平になるような言動に努めています。

**③について** 「いじめ」に該当する恐れがあるトラブルに対しては、職員が、該当の児童や周囲の児童から丹念に話を聴くなどして事実の把握に努め、必要に応じて、所長や主任が、個別指導を実施しています。その際には、職員間で役割分担もしながら、できる限り児童の心に寄り添えるように対応していきます。また、場合によっては、保護者の方々にもご協力をお願いすることもあります。

さて、上記の中で、マスコミなどでは、①や③については、盛んに論じられているのに、いちばん大切で難しいはずの②についての議論が少ないように思うのですが、それは、私の思い過ごしでしょうか？というのも、専門家が言うのには、学校や家庭で指導しても「いじめをしてしまう子」には、「いじめをせざるを得ない育ち」があるということです。「いじめは悪いことだ」という規範意識が薄い子どももいますが、「いじめは悪いと分かっているでもしてしまう」といった子どもが多いようです。さらには、「いじめは悪いと分かっているからこそしたくなる」という子どももいるということです。そのような子の場合には、悪くすると、大人たちが指導すればするほど、「大人に分らないように陰にかくれていじめるようになる。(陰湿化する)」と指摘されています。

そのようなことからすると、②については、児童クラブといたしましても、一人一人の育ちを深く理解したうえで、ご家庭としっかりと連携して個に応じた指導をしていかなければならないと考えています。

以上のようなことも踏まえて、このコーナーの趣旨である、「子育て」といった観点からいじめを考えていくとどうなるのかについて、次回からも、様々な学者の基本的な考え方や理論などについて紹介させていただけたらと思います。

今回はまず、それを考えていく際の観点を提示させていただきたいと思

います。保護者の皆様は、子育てにおいて、「①いじめられない子に育てること」と「②いじめをしない子に育てること」のどちらを優先させるのでしょうか？当然①も②も大切なことなのですが、どちらかと言えば①と答える方が多いのではないのでしょうか。きっと、それが自然の親心でしょう。しかし、ある学者によると、②よりも①を極端に優先させる親が増えてきた頃からいじめの件数が増えてきたデータがあるということです。

そこで、次回からは、「いじめをなくすための子育て」として、「いじめをしない子に育てること」と「いじめられない子に育てること」の2つの観点から、基本的な考え方や理論などを紹介させていただけたらと思います。

なお、次回からのこのコーナーで紹介させていただく、「いじめ」に関する理論の主な参考文献は、以下のとおりですので、一括して記載させていただきます。

(主な参考文献) 「教育は人間をつくれるか」(小原秀雄)、「魂の殺人」(A・ミラー)、「インナーチャイルドの癒し」(黒川昭登、上田三枝子)、「心理療法」(頼藤和寛、中川晶、中尾和久)、「しかるが育てるもの」「子どもの発達とつまずき」(高野清純)、「子どもがのびのび育つ叱り方ストレスになるほめ方」(加藤諦三)、「子どもの能力の見つけ方・伸ばし方」、「心の基地はおかあさん」(平井信義)、「自分を好きになる子を育てる先生」(諸富祥彦)、「脳なぜ心を作ったのか」(前野隆司)、「文化と感情の心理生態学」(荘厳舜哉)、「学校で出来ること出来ないこと」「空気の教育」(外山滋比古)、「〈自立〉の心理学」(国分康隆)、「アドラー博士の子どもを勇気づける20の方法」「頭のいい子より賢い子を育てるしつけ方」「失敗に負けない子に育てる本」(星一郎)、「超バカの壁」(養老孟司)、「いじめ・不登校から子どもを救う教室コーチング」(神谷和宏・上野恭子)、「悪いのは私じゃない症候群」(香山リカ)、「自分流教育のすすめ」(森毅)、「教師の気になる失敗気づかぬ失敗」(関根正明)、「ことばをはぐくむ」(中川信子)、「アドラー心理学シンプルな幸福論」(岸見一郎) 他

